

# 浮世絵展プロデュース

## 井黒 佳穂子さん(日本語日本文学専攻)

# 幕末・明治の「月岡芳年」 美術センスを生かし

幕末から明治時代にかけて活躍した浮世絵師、月岡芳年(1839~1892)の後期作品を集めた「月岡芳年展 描く」が4月、生田キャンパスの図書館本館で開催された。

中世文学や浮世絵を研究する大学院生の井黒佳穂子さん(文学研究科博士後期課程日本語日本文学専攻)が会場のデザインや展示をプロデュースしたほか、大学院生、文学部板垣則子ゼミ生の協力でポスター、パンフレット、芳年作品をプリントしたペン立てやしおり、ネット上の待ち受け画像を作るなど工夫をこらし、同展をきめ細かく宣伝して盛り上げた。



▲ 井黒さんのセンスが生かされた月岡芳年展のエントランス

芳年は、血みどろ絵や無残絵など強烈なタッチの絵画が知られるが、歴史画、美人画、役者絵、世相を描いた風俗画にも優れた作品を残しており、三島由紀夫や横尾忠則らにも影響を与え、近年再評価されている。本展では江戸戯作文学の収集家のご遺族からお借りした「雪花」「風俗三十二相」「修紫田舎源氏」「月百姿」など後期の代表作を中心に80点が並んだ。

「迫力と共に幽玄さ、洒脱さがある。特に今回の展覧会の中心となった後期作品には、その特徴が生かされている」と思いま

と、芳年の作品を研究。江戸文化や近世文学を学ぶ修士課程の木村薫さんや板坂ゼミ生(桜内美穂さん、川中麻衣子さん、関真奈美さん、原田梨穂さん、藤原紗織さん)以上3年次、上田直哉さん(4年次)の7人とチームを組み、PRに取り組んだ。芳年晩年の代表作「月百姿」をモチーフにした統一デザインを考え、美しいポスター、パンフレットが出来上がった。展示で最も気を配ったのは強烈なタッチの作品を「どのように見せるのか」だ。そこで▽役者を描く▽美人を描く▽英雄を描く▽庶民を描く▽物語を描く▽月を描く――の6セクションに分け、構成に統一感を持たせた。作品の個性を考え、照明にも気を配った。会期中、無料で配布したしおりやペン立ては、ゼミ生たちが苦労して完成させた手作り作品。来場者に大好評だった。



▲ 好評だったポスター、パンフレット、ペン立てなどを前に井黒佳穂子さんと板坂ゼミ生(生田キャンパス研究室で)

「本物の作品をPRできたのは大きな経験で、今後の活動への収穫になった。なによりも学生たちの協力が大きかった」と井黒さんは板坂ゼミの結束力を称えていた。

# 展覧会で、学会で活躍する大学院生

専門知識を生かし、展覧会で、学会で活躍した2人の大学院生を紹介しよう

## 古文書や住民の記憶 歴史を知り災害軽減策に

### 日本地すべり学会若手研究者のワークショップを開催

#### 鈴木比奈子さん(地理学専攻)

4月から大学院文学研究科修士課程地理学専攻に学ぶ鈴木比奈子さんは、学部卒業前に、研究者の第一歩となる貴重な経験をした。



▲ 防災地形学が専門の井上公夫さん(砂防フロントア整備推進機構)と鈴木さんによる夜間セミナー

軽減策を新たに打ち出すことができます。今回は、土砂災害多発地帯である小谷村を舞台に、古文書や住民の記憶を整理して、既存の地形・地質データと融合させることで、災害の歴史と発生個所を復元することを目的としました」と話す鈴木さん。実際に歩いて、地すべりによってできたせき止め湖と集落の移転、浸水被害と伝承などのテーマを参加者とともに検証していった。今回の調査で古文書には記載されていない、せき止め湖の存在がわかり、新たな研究テーマを見つけることができたという。

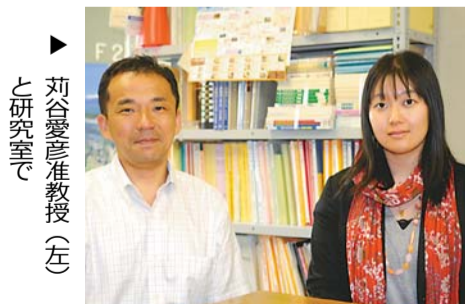
小さいころから登山やキャンプで白馬によく行っていたという鈴木さんは、「山の形が関東と違っは、なぜだろう？」と疑問に思ったことを覚えています。それが、斜面変動や地形発達に興味を持ったきっかけかもしれません」と振り返る。

「土砂災害は、特定の地域、中山間部で発生していますが、どのような場所か、どのような形で発生しやすいのか、地域の人々にあまり認識されていません。過去に発生した災害の歴史や、それを克服してきた過程、共存してきた住民の知恵を知り、伝えていくことで、災害

が山である日本の自然条件を背景に、斜面変動や関連する現象、災害防止対策に関する調査、研究などをテーマに研究会や講演会を行っている同学会



▲ 小雪舞う稗田山崩壊地(長野県小谷村)で解説する鈴木比奈子さん(左端)



▶ 刈谷愛彦准教授(左)と研究室で

「土砂災害は、特定の地域、中山間部で発生していますが、どのような場所か、どのような形で発生しやすいのか、地域の人々にあまり認識されていません。過去に発生した災害の歴史や、それを克服してきた過程、共存してきた住民の知恵を知り、伝えていくことで、災害が強いが、棚田など、豊かな自然風景を生み出してきたものでもあります。地理学を学んでいくうちに、バランスのとれたものの見方ができるようになるでしょう。キャンパスに隣接する生田緑地でのフィールドワークや泊まりがけの巡検(野外実習)を通じて、知識と実体験を融合させ、暮らしに役立つ研究ができるのも環境地理学専攻の魅力です」と話している。